

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2018年 3月

「恐れるな、小さい群れよ」「創造 - わたしたちの嗣業 (II)」「このお方を礼拝せよ」「油揚げの山芋詰め」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

創造 - わたしたちの嗣業 (II)

4

聖書の教え

朝のマナ

恐れるな、小さい群れよ

7

Fear Not, Little Flock

現代の真理

「このお方を礼拝せよ」

39

清めの特別な働き

力を得るための食事

油揚げの山芋詰め

44

お話コーナー

「良い羊飼いの (II)」

46

イエスの物語

教会

【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話 : 0494-22-0465

FAX : 0494-40-1045

【高知集会所】

〒 780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話 : 088-831-9535

【沖縄集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話 : 0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール support@4angels.jp

発行日 2018 年 2 月 28 日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Images on Front page, Joe Maniscalco on pages 6, 46

Printed in Japan

教会を通して完成するように 主が計画されたみわざ

神のみ名があがめられるようにと、教会を通して完成するように主が計画された、おどろくべきみわざがある。このみわざは、エゼキエルが見たいやしの川の幻の中に描かれている。「この水は東の境に流れて行き、アラバに落ち下り、その水が、よどんだ海にはいると、それは清くなる。おおよそこの川の流れる所では、もろもろの動く生き物が皆生き、……川のかたわら、その岸のこなたかなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、その実は絶えず、月ごとに新しい実になる。これはその水が聖所から流れ出るからである。その実は食用に供せられ、その葉は葉となる」(エゼキエル書 47:8-12)。

世の初めから神はこの世界に祝福を与えるために、神の民を通して働いてこられた。古代エジプトの国に対して、神はヨセフをいのちの泉となさった。ヨセフの誠実さが、エジプトのすべての民の命を守った。神はダニエルを通してバビロンのすべての知者の命を救われた。これらの救いは、実物教訓としてある。それは、ヨセフやダニエルが礼拝していた神とのつながりを通して、世に与えられる霊的祝福を例証するものである。キリストを心にやどしている者、キリストの愛をこの世に示す者はみな、人類の祝福のために神と共に働く者である。他の人々に分け与えるために救い主から恵みを受けるとき、霊的いのちの潮が彼の全身からあふれ出るのである。

神はご自身の品性を人々に現すために、イスラエルの民をお選びになった。神はその民がこの世の救いの井戸となるようにお望みになった。彼らには天来のことば、神のみこころの啓示がゆだねられた。……

しかし、イスラエルの人々は神の代表者としての尊い特権を見失っていた。彼らは神を忘れ、聖なる使命を果たさなかった。……

ユダヤの指導者たちは、教えを必要としないほど賢く、救いを必要としないほど正しく、キリストから来る名誉を必要としないほど高くあがめられていると思っていた。救い主は、彼らが誤用していた特権と、彼らが軽視していた仕事を他の人々にゆだねるために、彼らに背を向けられた。神の栄光が現われ、神のみことばは確立されなければならない。キリストの国はこの世界に建設されなければならない。神の救いは、荒野にある町々に知らされなければならない。こうして弟子たちは、ユダヤの指導者がなしとげることでできなかった仕事をなしとげるために召されたのである。(患難から栄光へ上巻 4:8)

第3課 創造 - わたしたちの嗣業 (II)

創造の順番

第一日：

神の最初のみわざは闇の地球に光が現れるようにされたことでした。それから、このお方は闇と光を分けられました。このお方は闇を「夜」と呼び、光を「昼」と呼ばれました。

第二日：

それから、空が現れました。はじめは地平線がなく、空も、惑星を覆っていた広大な大洋から区別できませんでした。それから、雲が引き上げられて、空と呼ばれる円蓋が地表の上に現れました。

第三日：

神のみ声が地に鳴り渡りました。水は大洋、あるいは海へ集められ、はじめて乾いた地面が現れました。山々、丘や平原が形成され、堂々とした川や美しい湖が点在していました。青々と成長した緑草が、創造主の命令によって、地から芽吹きました。

第四日：

天の星が現われ、月が夜に光を灯しました。地表は初めて燦然たる日光に浴しました。

第五日：

この日に、海にすむすべての命が創造されました。鳥が空をその喜ばしい旋律で満たし、空気を彼らの美しい歌声で震わせました。

第六日：

あらゆる地上の動物が呼び出され、存在するようになりました。この段階で、地上ははなはだしく美しいものでした。優雅な灌木や繊細な花が地を美と香りで満たしました。壮大な木々がなだらかな丘や山々を覆いました。空気は澄んで健康的でした。御使たちはこの光景を喜びました。一日終わるごとに、創造主はご自分のみわざに満足され、「神は見て、良しとされた」。

創造の御手のわざの主要部

地が呼び出されて存在するようになり、あふれんばかりの植物や動物の命に満たされたとき、神は人、すなわち創造を冠するみわざを創造されました。「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものゝとを治めさせよう』。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された」（創世記 1:26, 27）。

聖書に明らかにされているように、人の系図は、ある人々がわたしたちに信じさせようとしているような細菌や軟体動物、あるいは類人猿に帰するものではありません。王宮に大切にされているどんな系図よりも誇り高く、記録は次のように述べています、「……アダム、そして神にいたる」（ルカ 3:38）。

人は創造主のみ手によって造られたとき、気高い体格を持ち、完全に均整がとれていました。彼の顔は健康的な赤みを帯び、命と幸福に輝いていました。それでいながら、この完全な状態においてさえ、人は一人で住むままにはされませんでした。「神は自分のかたちに人を創造された。……男と女とに創造された」（創世記 1:27）。わたしたちの最初の両親が自分の創造主に対して忠誠を尽くし続けている間は、尽きることのない神の愛を理解し、楽しむ能力は絶えず、増し加わるのでした。

その後年月が過ぎ、今日の通り、人類が風雪にさらされ、低下してきても、わたしたちはダビデ王と共に次のように叫ぶことができます、「わたしはあなたをほめたたえます。わたしは恐るべく、くすしく造られました。あなたのみわざはくすしく、あなたは最もよくわたしを知っておられます」（詩篇 139:14 英語訳）。

大いなるみ神は、地を存在させ、美の衣をまとわせ、地と海にあらゆる不思議を造り、それを人に有益なもので満たしました。六日の間に、大いなるみわざは完成しました。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの日につげる」（詩篇 19:1, 2）。

「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。夕となり、また朝となった。第六日である」（創世記 1:31）。

第七日：

神はご自分のみ手のわざを、満足してご覧になりました。神は、疲れたから

ではなく、ご自分の知恵と善とご自分の栄光の現われの実に大変喜ばれたために、休まりました。

「神は……そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された」、すなわち人のための休息の日として取りおかれました（創世記 2:2, 3）。神の模範に従って、人はこの聖なる日に休むのでした。それは人が神の大いなる創造のみわざを覚えるためであり、彼の心が自分の造り主への愛と敬神に満たされるためでした。

人の家庭

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた」（創世記 2:8）。

創造主は、特別に彼らの家庭のために園を用意されることによって、さらにもう一つのご自分の愛のしるしを聖なる夫婦にお与えになりました。ここにはあらゆる多種多様な木々があり、多くはかおり高く美味な果実をたわわに実らせていました。麗しいぶどうの木はまっすぐに育ち、それでいながら、もっとも優美なよそおいを提示していました。その枝はもっとも豊かな色合いのおいしそうな実をつけて垂れ下がっていました。枝をたわめてあずまのかたちにし、生きた木々で住まいを作ることがアダムとエバの働きでした。園のもっとも美しい木が、命の木でした。それはエデンの中央の川のそばに立っていました。園は川の水で潤っていました。金や宝石が地表に現れていました。

「また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった。その第一の名はピソンといい、金のあるハビラの全地をめぐるもので、その地の金は良く、またそこはブドラクと、しまめのうとを産した」（創世記 2:10-12）。

とげもいばらも毒草もパラダイスにはありませんでした。そこには人が恐れなければならない野獣もいませんでした。気候は穏やかで快適でした。それは「はなはだ良かった」のです。

「しかし獣に問うてみよ、それはあなたに教える。空の鳥に問うてみよ、それはあなたに告げる。あるいは地の草や木に問うてみよ、彼らはあなたに教える。海の魚もまたあなたに示す。これらすべてのもののうち、いずれか主の手がこれをなしたことを知らぬ者があろうか」（ヨブ 12:7-9）。

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであつたように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れ場となつて下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

3 月

3月1日

主にあって安んじる

「さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みな報告した。するとイエスは彼らに言われた、『さあ、あなたがたは、人を避けて寂しい所へ行つて、しばらく休むがよい』。それは、出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。」(マルコ 6:30, 31)

かつて見られたことがないほどの激しさが、この世をとらえている。娯楽や金儲け、権力争い、生き延びるための争いにおいて、人々の体、心、そして魂は、恐ろしいほどの大きい力に支配されている。この激怒した混乱において、神はわたしたちに、ご自分のところへ来て、交わるよう命じておられる。「静まって、わたしこそ神であることを知れ」(詩篇 46:10)。……

永続的な休息—神が真実の方であることの認識—だが、この休息を有しているだろうか?この真の休息は、一切の自己義認を放棄し、キリストへ完全に明け渡し、ただキリストのみ旨どおりの者となり、またそれだけを行うときに見出される。これらの条件に従わない者は、休息を得ることはできない。

わたしたちは、ちりにまみれて熱くなっている大通りから離れて、キリストの愛の陰の中で休息を得、また静かな信頼という教訓をキリストから学ぼうではないか。キリストのご臨在において一時的に休むだけでなく、キリストと個人的な接触をもち、キリストとの交わりのうちに座らなければならない—これが、わたしたちが必要としていることである。多くの場合、献身の時においてさえ、神との真の交わりによる祝福を受けそこなう人々が数多くいる。彼らは、急ぎすぎている。彼らは急ぎ足でキリストの愛のご臨在の輪を通り過ぎていき、おそらくは、聖なる場所において一瞬立ち止まるが、キリストの勧告を待とうとしない。彼らは、聖なる教師と共にとどまる時間がないのである。彼らは、自分の重荷を負って自分の仕事へ戻っていく。

その働き人たちは、力の秘訣を学ばない限り、成功をおさめることはできない。彼らは、肉体的、精神的、霊的な力を新たにするために、神について考え、祈り、また神を待ち望む時間をとらなければならない。彼らは、神の霊により引き上げられなければならない。彼らは、これらを受けることにより、新たな命によりみがえらせられる。弱った体や疲れた頭脳は清新にされ、重荷を負っていた心は軽くなり、また励まされる。

主にあって休み、忍耐強く主を待ち望みなさい。そうすれば、主は、あなたにとって、荒野にある岩の陰のようになってくださる。主は、この世があなたに与えることも奪うこともできない休息を与える。わたしのもとにきなさい、とこのお方は言われる。そのとき、あなたの心は人知をはるかに超えた平安で満たされる。(サイン・オブ・タイムズ 1904 年 7 月 6 日)

もっとイエスを

「〔イエスと使徒たち〕は人を避け、舟に乗って寂しい所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ、一せいに駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がって大ぜいの群衆をこらんになり、飼う者のない羊のようなその有様を深くあわれんで、いろいろと教えはじめられた。」(マルコ 6:32-34)

キリストの強さにあって、わたしたちの弱さが強さになるとき、わたしたちは娯楽を追い求めることはなくなる。必要不可欠だと思われていた休日、単に自己満足のためだけに用いられることはなくなり、むしろあなたが魂を祝福し、啓蒙するための機会とされる。イエスは疲れたとき、砂漠において休める場所を求められた。しかし、天のマナを味わった数多くの人々がイエスの周りに集まってきた。悲しみと苦しみと悩みのうちに、人々がイエスの隠れ場を求めてきたため、神の御子には休む時間がなかった。このお方の心は同情に動かされた。なぜなら、彼らが羊飼いのいない羊のようであったからである。イエスの偉大な愛の心は彼らの弱さを感じて動かされ、彼らに、天の王国についてお教えになった。

イエスは、霊的な光と活力に満ちた貴重な真理をわたしたちに提示してこられた。しかし、その真理は、わたしたちの魂の内なる聖所へと持ち込まれたのだろうか？キリストは、あなたの信仰によってあなたの心に宿っておられるだろうか。もし、キリストがあなたの中におられるならば、あなたはキリストを他の人に表すようになる。わたしたちはもっと多くイエスを、そしてもっと自己を少なく、はるかに少なくしなければならない。わたしたちは心から次のように祈るべきである。「神よ、しかが谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐ」(詩篇 42:1)。イエスが心の中に宿って下さなければならない。そしてイエスがおられるところでは、肉の願望は征服され、神の霊の働きにより征服され続けるのである。「わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」(コリント第二 10:4, 5)。

キリストに従うと告白している者たちの中においてキリストの姿がはっきりと認識することができないため、わたしは嘆き悲しむばかりである。なぜなら、わたしは、イエスが失望しておられること、そして天の知的存在者たちが失望していること、また真理を求めている人々も失望していることを知っているからである。栄光の希望であられるキリストが内に形成されない限り、あなたは、あなたが接する人々に対してキリストを正しく示すことはできない。(サインズ・オブ・タイムズ 1892年6月6日)

3月3日

すべての人のためのパン

『ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう』。イエスは『人々をすわらせなさい』と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様に、彼らの望むだけ分け与えられた。』（ヨハネ 6:9-11）

イエスは、神に完全に信頼し、少量のパンを手にとられた。弟子たちというご自身の家族のためにわずかな備えしかなかったが、イエスは弟子たちにそのパンを食べよう招く代わりに、人々へ分け与えるように命じられた。パンはこのお方のみ手のうちで増えていった。ご自身命のパンであられるキリストへ伸ばされる弟子たちの手が空になることはなかった。その少量のパンは全ての人々にとって十分であった。全ての人々の必要が満たされた後、残りのパンが集められた。そしてキリストとその弟子たちは天から与えられた貴重な食物を食べた。

弟子たちは、人々がキリストと交流するためのかけ橋であった。この事実は、キリストの今日における弟子たちにとって大きな励みとなるべきである。偉大なキリストが偉大な中心、あらゆる力の源であられる。キリストの弟子たちは、キリストから供給を受けなければならない。もっとも知的で、もっとも霊的な頭脳を持った人でも、受けるときにのみ与えることができるのである。自分自身では、魂が必要としているものを何も供給することはできない。わたしたちは、受けるときにのみ与えることができ、また与えるときにのみ受けることができる。わたしたちは与え続けるとき、受け続けるようになる。そして与えれば与えるほど、ますます受けるようになるのである。（サイズ・オブ・タイム 1902年1月22日）

わたしたちが現代の真理を宣布しようとするとき、神の御使たちが人々の心に働きかけるために、そこにいる。これらの天の御使たちは常にわたしたちの周りを取り囲み、人々の心に真理を印象づける機会を待っている。それにより今度は彼らが真理を他の魂に伝える器となるためである。

わたしの兄弟姉妹がた、わたしたちは改心させられなければならない。わたしたちは、生ける神の力を必要としている……わたしたちは、真理を必要としている場所へ真理を伝えるために、最大の努力をしなければならない。わたしたちは、周りで滅びようとしている魂を探し求めようではないか。……わたしたちは、右も左も誘惑に囲まれたあわれな死すべき人間であり、自らを助けるために何もすることができない。しかし、キリストがわたしたちに与えて下さる助けにより、わたしたちはみ言葉の教理に固く立ち、また神の教えを他の人々に伝えられるようになる。わたしたちが神のみ言葉を説明するとき、天の御使たちが話す者と聞く者に恵みを与えるためにそこにいるのである。（ビュー・アofd・ヘアル 1909年4月8日）

水の上を歩く

「ところが舟は、もうすでに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まされていた。イエスは……海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。……するとペテロが……言った、『主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください』。イエスは、『おいでなさい』と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、『主よ、お助けください』と言った。イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』。」（マタイ 14:24, 25, 28-31）

興奮していたペテロは、喜びのあまり、ほとんど我を失っていた。ペテロは、イエスをご自分に従う者たちを救うために、波の上を歩いてこられるのを見た。そのためペテロは、かつてなかったほど、主を愛した。ペテロは主を抱きしめ、礼拝を捧げることを熱望した。ペテロは、イエスに会うことを熱望し、嵐の水の上を歩いてイエスのみ側へ行きたいと切望した。ペテロは次のように叫んだ。「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」（マタイ 14:28）。イエスは彼の要望にお答えになった。しかし、ペテロは水の上に片足を入れたとたん、得意げに後ろを振り向いて、他の人々が自分の動きを見て、自分がやすやすとしなやかな水の上を歩いているのを羨ましがっているかを見ようとした。

イエスから目を離したとき、その目は今にも彼をのみ込もうとしている荒れた水を見た。そのとどろきが彼の耳を満たし、彼の頭は浸り、彼の心は恐怖で満たされた。ペテロが溺れそうになったとき、彼はわれに返って、近くに自分を救うことのできるお方がおられることを思い出した。ペテロはその手をイエスへと伸ばし、「主よ、お助けください、さもないと死にます!」と叫んだ。憐れんだ救い主は、ご自分に伸ばされた震える手を掴み、ご自分のわきへ沈みかけた体を引き上げられた。その優しいみ顔と力強いみ手は、決して救いを求めて伸ばされた嘆願者たちから離れることはない。ペテロはへりくだって信頼し、主につかまった。イエスは、穏やかに彼に忠告した。「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」（31 節）。

その震えている弟子は、自分たちが二人とも船の中で安全に喜ばしい仲間のあいだに座るまで、主人の手に固くすがりついていて、しかし、ペテロは抑制され、静かにしていた。彼は、高揚と不信仰により命を失いかけたのだから、自分の仲間に対して何一つ誇る理由はなかった。他の人から尊敬されていることを見たいがために彼がイエスから目を離したとき、彼は導きを失い、疑いと恐怖が彼を支配した。クリスチャンの生活においても同じことがあてはまる。常に救い主に目をしっかり留めていることによってのみ、わたしたちはこの世における荒波の中を歩くことができるのである。（預言の霊 2 巻 269, 270）

3月5日

耐えるために栄養をとる

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。……弟子たちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、『これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか』。……それ以来、多くの弟子たちは去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった。そこでイエスは十二弟子に言われた、『あなたがたも去ろうとするのか』。シモン・ペテロが答えた、『主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。』」（ヨハネ 6:56, 57, 60, 66-68）

わたしたちの中においてだれが横道にそれ、誘惑する霊に心を向けるかを、神は知っておられる。神は、品性の欠陥をいだし続け、それらの欠陥が自分たちを征服する力となるのを許し、ユダのように自分の主を裏切るまでに導かれるようになる人々をご存じである。

キリストはその弟子たちに対し、テストとなる真理をもたらされた……そしてテストに耐えるならば、彼らは、魂を神性にあずかる者とする信仰を表すはずであった。しかし、そのテストは、彼らの信仰が空虚な告白にすぎないことを見出し、彼らは敵のほめかしによって、主に逆らったのであった。困難や自己否定は、耐えられないように思われ、彼らはもはやキリストと共に歩まなかった。

わたしたちは皆、試練や誘惑によるテストを受ける。そして、わたしたちは本当の信仰をもち、自分自身の中に根を持つことによってのみ、そのテストに耐えることができるのである。他の人々に頼るのはむだである。わたしたちは上よりとらえてくださることを認識しなければならない。自分が信仰のうちにいるかどうかを調べるために自らの心を吟味することの重要性を悟るために神がわたしたちを助けて下さるように。命のみ言葉からあふれる光をすべて集めないがために失敗する者が多数いる。彼らは神聖な教えを大切にせず、また貴重な神のみ約束について考えることをしない。もし彼らがこれらを実行したならば、義の実が彼らの生活においてあらわれたはずであり、また日々、ますます強く、ますますキリストに似た者へと成長したはずである。

わたしたちの体は、わたしたちが食べる物によって構成されている。栄養のある物を食べるにより、わたしたちは良い血液、しっかりとした筋肉、そして活力に満ちた健康を得る。同様に、わたしたちは霊的な性質も、わたしたちが何を考えるかによって構成される。もしわたしたちがキリストから与えられた教訓を受け入れ、実践し、キリストの教えに従って生きるなら、そのとき、わたしたちは救い主の肉と血を食べているのであり、生活と品性において、ますますキリストに似ていくのである。（ビュー・アンド・ハルド 1891年4月14日）

神の律法が最上

「人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる……わたしの天の父がお植えにならなかったものは、みな抜き取られるであろう。彼らをそのままにしておけ。彼らは盲人を手引きする盲人である。もし盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろう。」(マタイ 15:9, 13, 14)

悪い思いをもった人々は、誤った教理を持ち込む。そして、多くの場合、そのような誤った教理が神の真理にとってかわってきた。主は、教会が人間の戒めを受け入れるのではなく、ご自分の律法だけを認めるよう計画された。主は、純粋で混じりけのない真理が世において宣言されることを計画された。自己否定と十字架を負うことが、主の子供たちの特徴となるべきであった。彼らは、キリストの品性を世に示さなければならず、また世に対して、永遠の世界を示し続けなければならなかった。なぜなら、彼らの間で、神聖な統治の支配下におかれることによって成長する霊、品性が見いだされなければならなかったからである。彼らは、この世の君たちが作り出したよりも高い律法に従い、諸王の命令よりも偉大な権力に従順を捧げるのであった。(ビュー・アンド・ヘルド 1893 年 12 月 19 日)

天の宮廷に最初に誘惑を持ち込んだ者は、絶えず地上の教会の平和や繁栄に反して働いている。サタンは、自分の言葉を聞く人々に対して、教会が教会員を堕落の影響から自由にしようと努めるがゆえに、教会の権威を厳しく同情に欠くものとして表す。天におけるサタンの計画は、神を御座から下ろし、いと高きお方の場所を自分自身が占めることであった。その彼の計画は失敗に終わり、彼は天の宮廷から追放された。その時から、サタンは、神が自己中心的であり神の被造物に対して厳しいという印象を男女の心に植え付けようとしてきた。

神のみ事業に対して不名誉をもたらす要素をいくらかでも保持する教会は、神への不正を行っているのである。神はご自分の教会に置かれた責任において、ご自分の助けを求めて神の知恵に頼ることを奨励しつつ、一人一人の教会員に果たすべき役割を与えておられる。しかし、主の道から離れ、誘惑者とその共鳴者の側の立場をとる人々がいる。そして教会には、神を恐れて譴責を与えることにおいて、公正と義と忠実さをもって行動する人々がいるべきである。(ビュー・アンド・ヘルド 1908 年 3 月 19 日)

「彼らをそのままにしておけ」というみ言葉によって(マタイ 15:14)、キリストはご自分に従う者たちに、真実でない教理を正すために何の努力も払わなくてよいと言われたわけではなかった。このお方は弟子たちに彼らとの論争に入ってはならないと命じておられたのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1900 年 1 月 3 日)

全く期待されていなかったところでの偉大な信仰

「そして、けがれた霊につかれた幼い娘をもつ女が、イエスのことをすぐ聞きつけてきて、その足もとにひれ伏した。この女はギリシヤ人で、スロ・フェニキヤの生れであった。そして、娘から悪霊を追い出してくださいとお願いした。イエスは女に言われた、『まず子供たちに十分食べさすべきである。子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない』。すると女は答えて言った、『主よ、お言葉どおりです。でも、食卓の下にいる小犬も、子供たちのパンくずは、いただきます』。そこでイエスは言われた、『その言葉で、じゅうぶんである。お帰りなさい。悪霊は娘から出てしまった。』」(マルコ 7:25-29)

律法学者やパリサイ人たちがイエスの命を狙っていたため、イエスは、ご自分が働いておられた場所から離れたばかりであった。彼らはつぶやき、不満を述べ、不信仰と敵意を表し、彼らに無償で与えられていた救いを拒絶した。ここで、キリストは、神のみ言葉による光に恵まれず、またもっとも不幸で軽蔑されていた民族の女に会われた。しかし、その女は、キリストの神聖な感化に直ちに服従し、自分の求める恩寵を与えるこのお方の能力を信じる絶対的な信仰をもっていた。彼女は、主人の食卓から落ちたパン屑をいただきたいと請うた。もし、彼女が犬としての特権をいただけるのであれば、犬とみなされることをいとわなかった。彼女は、彼女の行動に影響を与える民族的、宗教的な偏見や高慢さをもっていない。彼女は、イエスが救い主であり、彼女のすべての願いを実現しようということを直ちに認めるのである。

救い主は満足された。彼は、ご自分を信じる彼女の信仰を試された。このお方は、彼女の願いを受け入れ、弟子たちへの教訓を終えられた。憐れみと愛の表情をうかべながら、彼女を見て、このお方は「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」と言われる(マタイ 15:28)。その時に彼女の娘は健康になった。悪霊はその時以降、彼女を悩ますことはなかった。彼女は、自分の救い主を認めつつ、自分の祈りが聞かれたことを喜んで、その場を離れた。

これは、イエスがその旅において行われた唯一の奇跡であった。このお方が、ツロとシドンの境界へ行かれたのは、ただその奇跡を行うためだけであった。このお方は、苦しみを負っていた女を解放したいと望まれたが、それと同時に、軽蔑された民の一人に対するご自分の憐れみの働きにおいて、彼らの益となるようご自分が弟子たちと共におられなくなるときのために、模範を残そうとされた。イエスは、弟子たちをユダヤ人の排他性から導き出し、自分の民以外の人々のために働くことについて関心を抱くようになることを望まれた。

このイエスの行為により、弟子たちの思いは、異邦人の間における彼らの前にある働きについてもっと十分に開かれた。彼らは、ユダヤの外において、有用な広い畑があることを認識した。(サィズ・オブ・タイムズ 1897年9月9日)

唯一のしるし

「さて群衆が群がり集まったので、イエスは語り出された、『この時代は邪惡な時代である。それはしるしを求めるが、ヨナのしるしのほかに、なんのしるしも与えられないであろう。というのは、ニネベの人々に対してヨナがしるしとなったように、人の子もこの時代に対してしるしとなるであろう。』（ルカ 11:29, 30）」

キリストの使命は、占星師として自らを高めることではなかった。彼の働きは罪深い人類のためのものであり、彼らを希望のない苦しみや悲慘さから救うために来られたのであった。このお方の誕生を予め述べた天使は次のように宣言した。「その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」（マタイ 1:21）。

邪惡なヘロデでさえ、キリストの働きの偉大さを認識することができた。しかし、律法学者やパリサイ人たちは、その偉大な働きを認めようとはしなかった。彼らはその働きについて上手く説明をすることができなかったため、その働きが悪魔によるものだとして責めた。この民を祝福するために聖霊が送られたが、彼らはその感化力に対して自らの心を閉ざした。キリストが彼らに示される証拠がいかに強力で確実なものであったとしても、彼らがその証拠を受け入れないことをご存じであった。そのため、キリストは病気を癒し、虐げられている人々を救いながら、天の会議において決められた働きを着実に進めていかれた。このお方はこの働きにおいて、正直な心をもつ人々に対して、ご自分の使命の十分な証拠を与えておられることをご存じであった。彼らの頑固さと光と真理に対する固い拒絶に、キリストの心は嘆き悲んだ。

この民の罪からわたしたちは教訓を得なければならない。現代においては、あたかも疑うことが美徳であり、偉大な頭脳をもつ証拠であるかのように、不信仰の立場をとる人々が数多くいる。有限な頭脳によって神の働きを完全に説明することはできないため、サタンは彼の詭弁を人々に伝えることにより、人々を不信の網の中にとらえている。これらの疑いをもっている人々は神に近づくならば、神はご自分のご目的を彼らの理解力に明らかにしてくださるのである。

光を拒む者たちの立場について、使徒パウロは次のように述べている。「もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれているのである。彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである」（コリント第二 4:3, 4）。心が新たにされていない人にとっては、聖霊の働きは、愚かであるが、へりくだって教えを受ける正直な、幼子のような人々、天の父のみ旨を知ろうとする人々に対しては、神のみ言葉は、救いに至る力として示されるのである。（ユース・インストラクター 1901 年 3 月 21 日）

3月9日

健全な個々人の識別力

「イエスが……弟子たちに尋ねて言われた、『人々は人の子をだれと言っているか』。彼らは言った、『ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし、ほかの人たちは、エリヤだと言い、また、エレミヤあるいは預言者のひとりだ、と言っている者もあります』。そこでイエスは彼らに言われた、『それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか』。シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです』。すると、イエスは彼にむかって言われた。『バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である』。」(マタイ 16:13-17)

ペテロが告白した真理は、信者の信仰の土台である。これこそキリストご自身が永遠のいのちであると宣言されたものである。だがこの知識を持っていることは、自己称賛の理由にはならなかった。それがペテロに示されたのは、彼に知恵や徳があったからではなかった。……「子たる身分を授ける霊」のみが、神について……深い事がらをわれわれに示すことができるのである。(各時代の希望 中巻 180)

もし、わたしたちが人間による知恵を神の知恵よりも重視するならば、わたしたちは人間による知恵の愚かさによって迷子になってしまう。多くの人々がこのような危険に直面している。彼らは、自分自身の経験を持っていない。彼らには、新たに生じがちな疑問や主題について、先入観や偏見のない判断力をもって、自分で祈りつつ考えるという習慣がない。彼らは、他の人々がどのように判断するかを見ようとして待つ。もし、他の人々が反対するなら、彼らはそれ以上何も必要としないのである。そのとき彼ら自身の思いの中では、それが何であつても価値はないという十分な証拠なのである。このような人々は少なくはない。しかし、彼らの数が大きくても、そのような人々は敵に長く屈服してきたために頭脳が弱く、経験がないこと、また、いつも赤子のように病弱で、他の人々の光によって歩き、他の人々の経験に従って生き、他の人々が感じるように感じ、また他の人が行動するように行動しているのだという事実は変わらない。彼らはあたかも、個性を持っていないかのように行動する。彼らの独自性は、他者の中に埋没する。彼らは単に、自分たちが正しいだろうと考える他の人々の影にすぎない。彼らは、彼ら自身の揺れ動きやすい品性に気づき、それを修正しない限り、永遠の命を得ることはできない。彼らは、終わりの時における危険に対処することができない。彼らは、悪魔に抵抗する力をもたない。なぜなら、彼らは悪魔を認識することができないからである。だれかが彼らの傍らにいて、敵が近づいているのか、それとも味方であるのかを知らせてあげなければならない。彼らは霊的ではないため、霊的な事柄を識別することができない。彼らは、神の御国に関する事柄について賢明でない。老若男女を問わず、人は皆、自分の経験を得るために他者に頼ることについて言い訳をすることはできない。……クリスチャンの体験と戦いにおいては、高貴な自己への信頼が必要とされている。(ビュー・アソッド・ヘラルド 1886年 8月10日)

終わりの時代における天の栄光

「六日ののち、イエスはペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった。」(マタイ 17:1, 2)

じめじめした石だらけの地面の上でイエスが低く頭を垂れておられたとき、突然、天が開き、神の都の黄金の門が広く開かれ、聖なる光がその山を照らし、ひざまずいておられたキリストを包んだ。キリストは、ひれ伏した状態から起き上がり、神々しい大能のうちに立たれる。キリストのみ顔から魂の苦悩が消え、その顔は穏やかな光で輝き、彼の衣服は粗末なちりのついたものではなく白くて、真昼の太陽のように輝いている。

寝ていた弟子たちは、その山全体を照らしていた栄光の洪水により目を覚ます。彼らは恐れと驚きをもって、自分たちの主人の輝く衣と光を放つみ顔を見る。……二人の栄光に満ちた人がキリストと会話をしていた。それは、シナイ山での雷と稲妻の中で顔と顔を合わせて神と語ったモーセであり、また、死を経験することなく火の戦車により天へ上げられたエリヤであった。地上に存在した人々のうち最も寵愛を受けるのにふさわしいと神に認められたその二人は、天の栄光を神の御子の許へたずさえ、慰めるという使命のために御父によってつかわされたのであった。(預言の霊 2 巻 328, 329)

ご自分の変貌に先立ち、イエスはご自分の弟子たちに、神の御国が力をもって来るのを見るまでは、死を見ない者が、そのときご自分と共にいると言われた。山上での変貌において、この約束が果たされた。なぜなら、彼らはキリストの御国の縮小版を目撃したからである。(同上 336)

イエスの変貌において、イエスは父なる神から栄光を受けられた。このお方の唇から次の言葉が発せられた。「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった」(ヨハネ 13:31)。裏切りと十字架の前に、イエスは恐ろしい苦悩に耐えられるよう力づけられた。キリストの体の肢体が自分たちの最後の戦いの時期に近づくにつれ、彼らはこのお方へと成長していき、均整のとれた品性をもつようになる。第三天使のメッセージが大いなる叫びになると、偉大な力と栄光が最後の働きに伴う。それは、預言者たちが語ったヤコブの悩みの時を通過するために、神の民を生かし、強める後の雨である。第三天使と共に存在するその光の栄光が、彼らを照らす。神は、危険の時代を通じてご自分の民を保たれる。(サイン・オブ・タイムズ 1879 年 11 月 27 日)

重大な障害に直面する

「さて彼らが群衆のところに帰ると、ひとりの人がイエスに近寄ってきて、ひざまずいて、言った、『主よ、わたしの子をあわれんでください。てんかんで苦しんでおります。何度も何度も火の中や水の中に倒れるのです。それで、その子をお弟子たちのところに連れてきましたが、なおしていただけませんでした』。……イエスがおしかりになると、悪霊はその子から出て行った。そして子はその時いやされた。それから、弟子たちがひそかにイエスのもとにきて言った、『わたしたちは、どうして霊を追いつけなかったのですか』。するとイエスは言われた、『あなたがたの信仰が足りないからである。よく言い聞かせておくが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって「ここからあそこに移れ」と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。〔しかし、このたぐいは、祈と断食とによらなければ、追い出すことはできない〕』。」（マタイ 17:14-16, 18-21）

真理のみ事業と神の栄光を前進させるために、敵に直面しなければならない時はいつでも、〔真理を擁護する人々〕は、どれほど注意を払い、またどれほどの謙虚さをもってその戦いにあたるべきことであろう。心の吟味、罪の告白、熱心な祈り、時には断食をもって、彼らは、神が特別に彼らを助けてくださるように、そして、ご自分の救う力のある尊い真理に栄光に満ちた勝利を与えて下さるようには嘆願すべきである。それによって、誤謬がその真の醜さのうちに現れ、その擁護者が完全に敗北するためである。真理のためにその反対者と戦う人々は、自分たちが単に人間のみに応じているのではなく、サタンとその使たちと戦っているのであることを認識すべきである。彼らは、誤謬と暗闇を伝道地にとどめ、真理を誤謬で覆ってしまおうと決意している。誤りは、人間の生来の心にもっとも一致していることが多いため、当然明白なものとして受け入れられる。安易に誤謬と暗闇を愛する人々は、真理によって改革されることを望まない。……もし、真理を擁護する人々が論拠の重要性に信頼しながら、神への信頼が弱く、そのような状態で反対者に応じる場合には、真理の側に得るものはなく、決定的な損失を被るようになる。（教会への証 1 巻 624, 625）

断食と熱心な祈り、深く心を探ること、厳格な自己吟味をもって、魂をあらわにしなさい。あなたの行為が一つでもあなた自身による批判的な吟味をのがれることのないようにしなさい。その後、死んだ自己と神のうちにキリストと共に隠された命をもって、あなたのへりくだった嘆願を捧げなさい。もし、あなたの心の中で悪に関心を示すならば、主はあなたの祈りをお聞きにならない。もし、主があなたの祈りを聞いてくださったなら、あなたは高ぶるようになるからである。……小事における忠実さがわたしたちの生活の特徴づけること、真の高潔さがわたしたちのすべての行為の特徴となること、そして神の御使たちがわたしたちの全ての行動を認識していることを心に留めていることは、なんと重要なことであろう！（同上 2 巻 158）

最も偉大な者は仕える

「だれでも一ばん先になろうと思うならば、一ばんあとになり、みんなに仕える者とならねばならない。」(マルコ 9:35)

わたしたちの高められた信仰を告白し、神の律法を守り、まもない主の再臨を待ち望む人々は、自分たちの周りの世とは区別され、分離した、よいわざに熱心な特別な民であるべきである。この終わりの時代において、世から神の民を区別すべき特徴の中に、へりくだりと柔和がある。キリストは次のように言われた。「わたしは柔和でへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うてわたしに学びなさい。そうすれば、あなたの魂に休みが与えられるだろう。」(マタイ 11:29)。ここに多くの人々が渴望し、それを得ようとするが、時間と金銭をかけている休息がある。

名誉や地位において他の人と並ぶか、あるいは他の人を超えようとするかわりに、わたしたちは、へりくだった忠実なキリストの僕となることを求めるべきである。この自己を誇張する精神は、キリストが弟子たちと共におられたときでさえ、弟子たちの間に争いを引き起こした。彼らは、自分たちの中で最も偉大な者はだれであるかについて議論をした。……

二人の息子をもつ母親が、彼らがイエスの御国で一人は右に、もう一人は左に座することにより、最も恩恵を受けることを求めたとき、イエスは、この世における栄誉と栄光は、イエスの王国における栄誉と栄光の正反対であることを示された。偉くなりたいと思う者はだれでも、へりくだって他の人々に仕える者とならなければならなかった。また、かしらになりたいと思う者は、ちょうど神の御子が人間の子らのために仕え、しもべとなられたように、しもべにならなければならなかった。(ビュー・アッド・ハルト 1887年1月18日)

キリストは次のように言われた。「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、……わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。」「わたしのくびきを負」いなさい(マタイ 11:29)。わたしたちは、そうするであろうか。わたしたちはキリストのくびきを負うだろうか。わたしたちは、思いの精神において新たにされ、日々、へりくだりと幼子のような単純さを培い、よるこんですべての人の中で最も小さい者、すべての人のしもべとなるだろうか。このような精神をもたないかぎり、わたしたちの命がキリストと共に神のうちに隠されることはない。多くの人々があらわす自己尊大は、キリストの柔和と心の低さとは正反対である。自分を最も少なく、そしてイエスのことを最も多く考える者は、天の御国において天の王国において最も偉大な者になる。(ビュー・アッド・ハルト 1895年5月14日)

「あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない」とキリストは宣言された(マタイ 23:11)。奉仕をする人は自らをへりくだらせる。そしてこうすることによって、彼は主が安全に尊ぶことのできる場所へ置かれるのである。なぜなら彼は、キリストの精神をもっているからである。(同上 1895年5月14日)

幼子のような信仰

「すると、イエスは幼な子と呼ばひ寄せ、彼らのまん中に立たせて言われた、『よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる』。」(マタイ 18:2-6)

イエスの弟子たちは、キリストの王国の性格について教えられただけでは十分でなかった。彼らにとって必要だったことは、王国の原則と一致するようになる心の変化であった。イエスは小さな子供をお呼びになって、彼らのまん中に立たせ、それからやさしくその子を腕の中にいだいて、「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」と言われた(マタイ 18:3)。幼な子の単純さと、私心のなさ、信じきった愛情は、天の神がとうとばれる特性である。これこそ真の偉大さの特徴である。

ふたたびイエスは、ご自分の王国の特徴は世俗的な威厳と見せびらかしではないことを弟子たちに説明された。イエスのみもとでは、こうした区別は忘れられる。金持ちも貧しい者も、学問のある者も無知な者も、社会的な地位や世俗的な優越など心にとめないで融和する。だれでもみな血で買われた魂、あがなって神のみもとへ戻してくださったおかたに一樣によりたのんでいる者としてまじわるのである。

罪を深く悔い改めたまじめな魂は、神の御目にとうとい。神は、地位によらず、富によらず、知的な偉大さによらず、ただキリストと一つであることによって、人々にご自身の印をおされる。栄光の主は、柔和で心のへりくだった者に満足される。ダビデは、「あなたはその救いの盾をわたしに与え、」またあなたの「へりくだり」(文語訳)は、一人間の品性における一つの要素として―「わたしを大いなる者とされました」と言った(詩篇 18:35)。(各時代の希望中巻 213, 214)

牧師や人々が、自分たちの誇りや独立心を、幼子のような教えられる精神と交換するならば、また彼らが、自分自身の理解に信頼し、この世の格言や習慣に合わせる代わりに、イエスのそばに座って熱心に「主よ、わたしに何をおさせになりたいのですか」(使徒行伝 9:6)とたずねるならば、イエスの知恵が彼らを導き、イエスの霊が彼らの努力と共に働く。そしてわたしたちは、今サタンの軍隊に入りこんでいる若者たちが、命の君の旗の下で奉仕をするのを見るようになる。(ザインズ・オブ・タイムズ 1881 年 11 月 24 日)

全ての人々に何らかの働きが

「ヨハネがイエスに言った、『先生、わたしたちについてこない者が、あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました』。イエスは言われた、『やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはできない。わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方である。』（マルコ 9:38-40）

ある人々は……使徒ヨハネは、次のように述べたときの精神にふける傾向がある。「先生、わたしたちはある人があなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちの仲間でないので、やめさせました」（ルカ 9:49）。組織や規律は不可欠である。しかし、今、キリストの福音の単純さから離れてしまうという非常に大きな危険性が存在している。わたしたちが必要としているのは、単なる形式や儀式への依存を減らすこと、そしてはるかにもっと大きな真の信心の力である。もし、生活や品性が模範的であるならば、能力がなんであれ、望む者はみな働きなさい。彼らがあなたの方法通りに従って行わなかったとしても、彼らを非難したり、落胆させる言葉を一言も発してはならない。パリサイ人たちがイエスを賛美していた子供をイエスが黙らせてくださるよう望んだとき、救い主は次のように言われた、「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」（ルカ 19:40）。預言は実現されなければならない。同様に今日、働きがなされなければならない。働きをおこなうべき場所は沢山ある。全ての人々は、全力を尽くして自らの役割を果たさなければならない。一タラントをもつ人は、そのタラントを地に埋めてはならない。神はすべての人にその能力に従って働きをお与えになった。より多くの信任や能力を委ねられた者たちは、彼らよりも能力や経験が劣る者たちを黙らせようとしてはならない。一タラントを持つ人々は、二タラントや五タラントの人々が接することのできない人たちに接することができるかもしれない。偉大な者も小さい者も一緒に、渇いた魂へ命の水を運ぶための器として選ばれている。神のみ言葉を宣布する人々は、最もつましい働き人の上に自分の手を置いて、「あなたはこの場所で働かなければならない。さもなければ、何の働きもしてはならない」と述べてはならない。兄弟たちよ、手をのけられよ。全ての人々が自らの領域において、武具を身に着け、へりくだった方法でできることを何でもしなければならぬ。働きにおける彼らの手を強めなさい。パリサイ主義が支配する時間はない。神が選ばれる人々を通して、神に働いていただきなさい。神のメッセージは広められなければならない。

全ての人々は、彼らに委ねられた能力、すなわち資金のみならず、神の御国を建設するのに役立つすべての才能を賢明な方法で用いることにより神への忠誠を示さなければならない。……その働きに従事する人々の数は数人かもしれないが、何千人もの人々が彼らと同じように関心を持たなければならない。神は、教会の平信徒たちから神のみ事業における働きを免除するようには考えておられない。（教会への証 5 巻 461, 462）

3月15日

神のみ旨を行うために明け渡す

「イエスは……言われた、『わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであらう。』(ヨハネ 7:16, 17)

どのような自己否定や自己犠牲が生じたとしても、神のみ旨を行うことを心のうちに完全に決意している人は、彼自身の経験を通じて真理を理解することができる。神の戒めに従い、天の教えからそれない人々は、命に入ることができる。神のみ旨を行うことをよしとするということは、心と愛情の全体を神の支配下に明け渡すということである。そのような人は、教理を知り、疑問や疑いをもったり、二つの意見の間で立ち止まったりすることがない。なぜなら、彼は喜んで全てを神に従わせようとするからである。……わたしたちが自らをキリストに捧げ、キリストのみ旨を行おうとするとき、わたしたちはダビデの次の言葉の真実さを悟ることができる。「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」(詩篇 119:130)。そのとき、理性と良心は神のみ旨と完全に一致し、神の真理と魂との衝突はなくなる。キリストが教えた教理は、魂の救いのために不可欠である。なぜなら、品性の完全とは、イエスのうちにあるがままの真理への自発的な従順の結果だからである。これが愛によって働き、魂を清める信仰である。(ビュー・アノット・ハルド 1896 年 7 月 7 日)

わたしたちは、イエスを喜ばせるために生きなければならない。そのように生きることにより、わたしたちの信仰とイエスへの信頼は日々、強くなる。わたしたちは、イエスがわたしたちのためになされたことと、わたしたちのためにしようとしておられることを理解するようになり、イエスへの愛を示すために何かをしようとする熱心な願いと共に快活さを持つようになる。そうすることが習慣になる。わたしたちは、従うべきかを問うことなく、光に従い、キリストの働きを行うようになる。わたしたちは都合を考えたり、従うことにより現世の利益が大きくなるかを問うたりしなくなる。イエスを愛する人々は、彼の全ての律法に従うことを愛するようになる。彼らは、教理を理解するために聖書を丹念に調べるようになる。ただ真理だけが彼らを満足させるのである。(同上 1885 年 8 月 25 日)

キリストの清める血の力を感じた罪人は、キリストご自身の尊い命により自分を買ってくださった救い主に対して、自分のすべてを負っているとの深く永続的な自覚がある。このような意識とキリストの愛への感謝をもつすべての人は、自分の存在のすべての力をキリストの奉仕のために捧げることは最高の特権であると考え。変化させるキリストの恵みは、心の願いをかたち造り、真理のためには喜んであらゆる犠牲をはらう準備ができるようになる。(サイズ・オブ・タイムズ 1888 年 1 月 13 日)

生ける水の川

「祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである。(ヨハネ 7:37-39)

泉の生ける水から栄養をとるヤシの木が、砂漠の真ん中で青々と茂るように、クリスチャンは神の愛という泉から豊かな恵みを得ることができる。そして、罪の砂漠で休むことができず疲れ果て、今にも滅びようとしている魂をその水の場所へ導き、彼らが飲んで、生きるようにすることができる。……

わたしたちは、個人的に最も価値のある経験をもつことができる。この世に悪が満ち溢れ、またわたしたちが不信心な者たちや疑う者たち、あるいは生きているとは名ばかりで死んでいる自称クリスチャンに囲まれているという事実は、わたしたちのうちの一人でも滅びへ向かう濁流に飲み込まれる理由にはならない。ほとんど全世界的に神を捨てているがゆえに、わたしたちはますます固く忠実に立つ必要がある。(サィズ・オブ・タイム 1884年6月26日)

霊感の言葉は、人の心の中で熟考されると、命の水の川から流れる生きた流れのようになる。……

であるから、あなたは聖書を手に取って、天父のみ前に立ち、次のように言いなさい。「わたしに光を与えてください、何が真理かを教えてください」。主はあなたの祈りを聞かれ、聖霊があなたの魂に真理を印象づけて下さる。(同上 1893年2月6日)

わたしたちはすでにある程度の聖霊を受けているかもしれないが、祈りと信仰によって、さらに多くの聖霊を求め続けなければならない。わたしたちは、決して努力をやめてはならない。もし、わたしたちが前進することをやめ、前の雨と後の雨の両方を受ける態度のうちにいないならば、自分の魂を失うことになり、その責任は自分自身にあるのである。……

わたしたちは、神が命の水の泉を開いてくださるように祈らなければならない。そして、わたしたち自身が、生ける水を受けなければならない。わたしたちは、悔いた心をもって、今この後の雨の時代に、恵みの雨をわたしたちの上に降らせて下さるよう、最も熱心に祈ろうではないか。わたしたちが出席する全ての集会において、今この時に、神がわたしたちの魂に暖かさと潤いを与えて下さるよう、わたしたちの祈りが上るべきである。わたしたちが聖霊を神に求めるとき、聖霊はわたしたちのうちに働きかけて、柔和と、思いのへりくだりと、完成させる後の雨を求めて意識的に神へ依存する心を与えて下さる。(レビュー・アンド・ヘラルド 1897年3月2日)

3月17日

キリストはどのように話されたか

「こうして、群衆の間にイエスのことで分争が生じた。彼らのうちのある人々は、イエスを捕えようと思ったが、だれひとり手をかける者はなかった。さて、下役どもが祭司長たちやパリサイ人たちのところに帰ってきたので、彼らはその下役どもに言った、『なぜ、あの人を連れてこなかったのか』。下役どもは答えた、『この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした』。」(ヨハネ 7:43-46)

「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」とこのお方を捕まえるために送られた役人たちは宣言した(ヨハネ 7:46)。キリストの言葉は、キリストだけが与えることのできる平安に飢えていた人々を慰め、力づけ、祝福した。キリストは、なんと優しく、また忍耐強いお方だろうか! 貧しい人々、痛めつけられていた人々、そして虐げられていた人々に対するキリストの教訓は、なんと慰めと優しさに満ち溢れていたことだろう!

教育を受けていた人々は、キリストの教えに魅了され、また無学な人々は、その教えによりいつも利益を得た。なぜなら、キリストの教えは、彼らの理解力に訴えたからである。キリストの例えは、日常の事柄に基づいていたので、単純であったが、その中には驚くほど深い意味があった。空の鳥、野のゆり、種、羊飼いと羊—これらの実物により、キリストは不朽の真理を例証された。……

キリストはいつも、最も単純な表現をお使いになった。しかし、彼の言葉はいつも、深く偏見をもたずに考える人々に受け入れられた。なぜなら、キリストの言葉は、彼らの知恵を試すものだったからである。霊的な事柄はいつも単純な言葉によって提示された。学識のある人々へ語られるときでさえもそうであった。なぜなら、それらの人々も霊的な事柄については、無知であることが多かったからである。単純な言葉は最も雄弁である。教育を受けた者も受けていない者も、最も平易で単純な方法で語られる必要がある。それにより、真理は理解され、心の中に留まることができるのである。キリストは彼の周りに集まった群衆にも同様に語られた。そして、学識のある者も無学な者もこのお方の教訓を理解することができた。

聞く人々にとても安らぎと喜びを与えるキリストの言葉は、今日わたしたちのためである。忠実な羊飼いが自分の羊のことを知り、よく世話をするように、キリストはご自分の子らの世話をなさる。キリストは、各々を囲む試練や困難をご存じである。……

キリストは全ての人の苦しみと悲しみを計られた。キリストは、ご自分とくびきでつながる全ての魂のためにくびきの重さを負ってくださる。キリストは、わたしたちが奥底で感じ、表現することのできない悲しみをご存じである。もし、だれ一人として人の同情がわたしたちのためにわきおこらなかったとしても、同情してくれないと感じる必要はない。キリストはご存じである。そして、このお方は、わたしを見て、生きなさい、と言われるのである。(ビュー・アズ・ヘラルド 1897年5月18日)

その罪のないお方が許される

「すると、律法学者たちやパリサイ人たちが、姦淫をしている時につかまえられた女をひっぱってきて、中に立たせた上、イエスに言った、『先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか』。彼らがそう言ったのは、イエスをためして、訴える口実を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に何か書いておられた。彼らが問い続けるので、イエスは身を起して彼らに言われた、『あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい』。そしてまた身をかがめて、地面に物を書きつつけられた。これを聞くと、彼らは年寄から始めて、ひとりびとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女は中にいたまま残された。そこでイエスは身を起して女に言われた、『女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったのか』。女は言った、『主よ、だれもごさいません』。イエスは言われた、『わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。』」（ヨハネ 8:3-11）

イエスは、この女性を徳の生活へと引き上げることにより、最も深刻な病人の体を癒すことよりも偉大な働きをされた。キリストは、永遠の死に至る魂の病気を治された。その悔いた女は、イエスの最もつながりの強い友の一人となった。彼女は、自己犠牲の愛と礼拝によって、キリストの許しと同情に応えた。その後、彼女が悲しみに打ちひしがれて十字架の下に立ち、主のみ顔に死にかかっている苦悩を見て、このお方の苦しい叫びを聞いたとき、彼女の魂は再び刺し通された。なぜなら、彼女は、その犠牲が罪のためになされたものであることを知っていたからである。そしてその神の御子にこの苦悩をもたらした一つの要因は彼女の深い罪であったから、その責任は非常に重いと感じられた。彼女は、救い主の体を刺し通したこの痛みが、自分のためであることを感じた。このお方の傷から流れた血は、彼女の罪の記録を除去するためであった。死にかけたこのお方の唇から出たうめきは、彼女の違反によって引き起こされたのであった……

過ちを犯している人々に冷淡に目をそむけて向きを変え、坂から転げ落ちるままに放置する者たちは、真にキリストに従う者ではない。クリスチャンの愛は、批判するに遅く、悔い改めを認めるのに早く、いつでも許し、励まし、さまよっている人を徳の道へ立たせ、その足をそこへ留める用意ができています。……いつでも真つ先に他の人々を批判し、彼らが過っているのを見つけるのが早く、彼らが処罰されることを強く望む者たちは、しばしば彼ら自身の生活において、批判された人々よりも罪深い。（預言の霊 2 巻 352-354）

3月19日

わたしたちの世を照らす

「イエスは、また人々に語ってこう言われた、『わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであらう』。」(ヨハネ 8:12)

「神は光であって、神には少しの暗いところもない」(ヨハネ第一 1:5)。暗闇の中を歩く人々は、イエス以外の指導者に従っている。暗闇はサタンの雰囲気である。……あなたがたは、「暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝える」べきである(ペテロ第一 2:9)。キリストが光のうちにおられるように光の中を歩いている人の口からは、困難や試練の時に、不満やつぶやきの言葉は出ない。彼は、光のうちで喜び、世の光であられるお方を囲む清い雰囲気を楽しむのである。キリストの従順な子らの上に輝くキリストからの光は、彼らの生活から世の闇へと反射する。光を与えるお方は、彼らを光を担う者とされる。「あなたがたは、世の光である」(マタイ 5:14)。

神のみ言葉を信じると告白している人々のうち、何人が日々、熱心な信仰と祈りによって、イエスから貴重な光を集め、その光がこの世を照らすようにすることにより暗闇と悪を譴責しているだろうか。そしてそのようにすることにより、この世が神に栄光を帰せざるを得ないようにしているであろうか。あなたは、イエスの純粹さ、忍耐、および愛をあなたの生活に取り込んでいるだろうか。あなたの光は、明確でたしかな光線のうちに輝いているだろうか。もし、そうでないならば、あなたの告白は偽物にすぎない。世俗的な霧があなたの魂を取り巻き、あなたの光は弱く、おぼろげなものになっていないだろうか。それらが消失するように、偉大な光の源に近づきなさい。なぜ、暗闇に留まるのだろうか。なぜ、闇のことを話すのだろうか。(サイン・オブ・タイムズ 1891 年 9 月 28 日)

全地が神の栄光により照らされなければならない。しかし、ある人にとっては、キリストにわたしが彼らを癒すと言っていたために、光を見て認識し、改心することがなんと難しいことであろう。利己心、誇り、形式主義、そして自己義という大気が彼らの魂を囲むため、彼らにとっては光を光として認識し、それを感謝することが非常に難しい。ある人々は、光を離れて暗闇の中へ歩き出す。そして、かつては光を持っていたがゆえに、彼らの魂を囲む闇はどれほどさらに大きいことであろう。……豊かに与えられた光は感謝されず、また実生活に取り込まれてこなかった。そして多くの人々はみ言葉を行う者ではなかった。真の信徒は、神のみ前で、失われた人々を救うために探し求める伝道者となるべき自分の厳粛な責任を自覚すべきである。わたしたちは、献身した働き人たちの軍隊が、自分自身の意志や喜びではなく、神のみ旨を実行することを求めているところを見たいのである。(同上 1893 年 5 月 29 日)

わたしたちの前にある目的地

「イエスは言われた、『あなたがたが人の子を上げてしまった後はじめて、わたし がそういう者であること、また、わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えて下さ ったままを話していたことが、わかってくるであろう。わたしをつかわされたかたは、 わたしと一緒にられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、 わたしをひとり置きざりになさることはない。』」(ヨハネ 8:28, 29)

キリストは、神の律法の諸原則への忠誠から離脱されたことは一度もなかった。 このお方は、ご自分の御父のみ旨に反することをしたことは一度もなかった。天使、 人間、悪魔の前で、彼はもし他の人が語ったならば冒涇となつたはずの次の言葉 を語ることがおできになった。「わたしは、いつも神のみこころにかなうことをし ている」(ヨハネ 8:29)。

彼の敵は3年の間、毎日彼につきまとい、そのご品性に何か汚点を見つけよう とした。サタンは自分の悪の連合をことごとく引き連れて、キリストに打ち勝とうと した。しかし、サタンに有利になるようなことは何一つ見つからなかった。(パシフィック・ユニオン・レビュー 1903年12月17日)

キリストは、神のひとり子であられたが、僕となられた……このお方は、天の御 使たちでさえなすべない働きをなすよう定められた。呪いによって焼き印を押され、 損なわれた世界の贖いに要求される働きを委ねることができるのは、ただこのお方 だけであつた。そしてこの賜物のうちに、御父は全天を世に与えて下さつたのである。

神の御子、すなわち天使にあがめられ、天の光であられたお方にとって、これ はなんとという変化だったことであろう!このお方は、墮落したことのない諸世界の快 適な家庭へ、また不忠実と反逆が一度も侵入したことのない純粋な雰囲気のあるところ へと行くこともおできになったのである。そしてそこでは、賛美と愛の喝さいをも って受け入れられたはずであつた。しかし、贖い主を必要としていたのは、墮落し た世であつた。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがき いたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」とこのお方は言われた (マルコ 2:17)。彼は、この世に希望と救いのメッセージをもたらすことによって、天父 を代表するために来られた。このお方は、自分自身のために生きることをなさらな かった。ご自身の安逸や娯楽に応ずることはなかった。このお方は誘惑に屈する ことがなかった。そして、罪人が贖われて、ご自分が用意される住まいで永遠に 住むことができるように、死に至るまで下りてこられた。このお方の使命は、自分 たちの罪のうちに死のうとしていた魂に教えることであつた……人が、神の律法が 要求しているように純粋で、聖なる、汚れていない者になることを拒むとき、神から 歩み去っているのである。……

人は、神の御子に与えられたのと同じ働きを成功させるためにのみ生きるべき である。彼は、神と共に働く共労者となることにより誉を受ける。そして主は、そ のわざに満足される。神は、わたしたちのためにできることを全て実行された。こ のお方は、神の御子のご品性のうちに、ご自分のご品性の完全な模範をお与えに なつた。そして、キリストに従う人々が比類のないこのお方の生活と品性を見るとき、 このお方のみかたちに成長するのは、彼らの働きである。(レビュー・オブ・ヘラルド 1898年2月15日)

3月21日

ついに自由！

「イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた、『もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう』。」(ヨハネ 8:31, 32)

ここに、満足と平安と幸福の秘訣がある。すなわち、自然と神の律法への従順である。キリストの柔和とへりくだりを持つ真のクリスチャンは、単純で便利で健康的な衣服に満足し、有用な生涯を送ろうと努め、自分の習慣をイエスの模範に一致させようとする。そのような人は、最も真実な幸福を見出し、また成功という報酬を受ける。そのような人は、人工的な生活という奴隷生活を超越し、キリストのような単純さの自由と恵みへ入れられる。(健康改革者 1877年2月1日)

人々は、自由や福音による解放について語るかもしれない。彼らは、神の律法に対して奴隷にはなっていないと主張するかもしれない。しかし、福音の望みの感化は、罪人が神の律法への違反を続けながら、キリストの救いを無償の恵みとして見るようには導かない。真理の光が彼の思いに理解され始め、彼が神の要求を完全に理解し、自分の違反の範囲を自覚するとき、彼は自分の生き方を改革し、救い主から与えられる力を通して神に対して忠実になり、新しくより純粋な生活を送るようになる。(サインズ・オブ・タイムズ 1897年2月25日)

わたしたちが憐れみ、恵み、また平安を得られるようにするための備えは完全であり豊かである。そうであれば人類は、なぜ真理が奴隷のくびきであるという考えを抱いているかのように行動するのであろうか。その理由は、主がいくしき深いことを味わったことも、見たこともないからである。キリストの愛を大切にす魂は、自由、光およびキリストにおける喜びに満ちている。そのような魂のうちに、二心の思いはない。その人全体が神を慕い求める。彼は、自分の義務を知ろうとして、人に助言を求めることはせず、あらゆる知恵の源であられる主イエスのみ許へ行く。彼は、確立されている標準を見出すために、神のみ言葉を丹念に調べる。(ビュー・アノド・ヘアルド 1906年3月29日)

あなたが自分自身をキリストに委ねるとき、あなたはあなたのためのキリストのご目的を果たしているのである。あなたは、もはや自分自身に対して律法ではない。あなたの意志やあなたの行動の自由が侵害されることはない。あなたの思いは、新しい律法の権威の下におかれる。しかし、それは王家の自由の律法である。存在すべてが神に明け渡される。心は変えられる。(パトル・クリーク・レー 66)

真理は決して、魂を奴隷にすることはない。魂をとりこにするのは、真理から離れて誤りに向かうときである。緊密な関係によりキリストと結びついている人は、罪の奴隷から解放される。(サインズ・オブ・タイムズ 1900年8月22日)

自存しておられるわたしたちの創造主

「イエスは彼らに言われた、『よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生れる前からわたしは、いるのである。』」(ヨハネ 8:58)

キリストは、昔から存在しており、また自存しておられる神の御子である。……キリストは、ご自分の先在について語られるとき、わたしたちの思いを数えられないほど遠い昔にさかのぼらせる。このお方は、ご自分が永遠の神との緊密な交わりのうちにおられなかったことはかつてなかったことを保証しておられる。(サインズ・オブ・タイムズ 1900 年 8 月 29 日)

神のみ子は、父のみ座に共に座をしめられた。そして、永遠、自在の神の栄光が両者を包んでいた。み座のまわりには、数えきれない大軍、「万の幾万倍、千の幾千倍」もの聖天使が集まった(黙示録 5:11)。彼らは、使者、従者として、最高の栄誉を与えられた天使で神のみ前から来る光を受けて喜びに満ちていた。王なる神は、集まった天の住民の前で、神のひとり子であるキリストだけが完全に神の計画に参与し、神のみこころの大いなる計画を実行することがゆだねられていることを言明なさった。神のみ子は、大ぜいの天使を創造なさったときに、神のみこころを行なわれたのであった。そして、彼らは、神に対すると同じく、み子に対しても、尊敬と忠誠を尽くさなければならなかった。キリストは、この地球とその住民の創造のときにも、神の力を働かされることになっていた。しかし、それにもかかわらず、キリストは、神の計画にそむいて、権力を求めたり、自分を高めたりすることをせず、父の栄光を高め、神の恵みと愛の御目的を実行しようとなさったのである。(人類のあけぼの上巻 6)

神のみ子が父と同等に高められたことは、自分も同様に崇敬と栄誉を受けるべきだと主張していたルシファーにとって不正行為を意味した。もしも、この天使のかしらが、彼の当然到達すべき高い地位につくことができれば、それは天の全軍に、大きな利益をもたらす。なぜならば、彼のねらいはすべての者に自由を確保することだからである。ところが、今まで彼らに与えられてきた自由さえ、もう失われた。なぜなら、独裁的支配者が、彼らの上に任命され、その権威にすべての者が従わなければならないからである。これは、巧妙な欺きであり、ルシファーのたくらみによって、天の宮廷に急速に広がっていった。

キリストの地位、または権威には何の変化もなかった。ルシファーのしつとと虚偽のことば、そして、彼がキリストと同等の地位を主張したこと、神のみ子の真の地位についての宣言が必要になった。しかし、み子の地位は、初めから同じであった。(人類のあけぼの上巻 7, 8)

わたしたちの創造主はイエス・キリストであられる。このお方がわたしたちの存在の創始者であられる。(健やかな生涯 17)

わたしたちの生命はイエスから来ている。このお方のうちには本来の一借り物でも派生したものでもない—生命がある。(サインズ・オブ・タイムズ 1914 年 8 月 6 日)

3月23日

昼の間に急がなければならない

「〔イエスは言われた、〕わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だれも働けなくなる。」(ヨハネ 9:4)

働くことができる人々のうち多くが、何もしていない。彼らは、サタンの誘惑の的である。真理の知識をもつ全ての教会員は、昼の間に働くことが期待されている。なぜなら、夜が来るからである。そのときにはだれも働けない。まもなく、わたしたちは、その夜が何を意味するかを理解するようになる。神の御霊は、悲しんで地から離れつつある。国々は互いに怒っている。戦争のための準備が広くなされている。夜はすぐそこまで来ている。教会は立ちあがって、自分に与えられた働きをするために出ていきなさい。すべての信徒は、教育の有無にかかわらず、メッセージを伝えることができる。

わたしたちの前に、永遠が広がっている。幕は引き上げられようとしている。わたしたちの周りの至る所で魂が減じようとしているときに、利己的に安逸を愛して執着するとは、何を考えているのであろうか。わたしたちは、完全に冷淡になってしまったのだろうか。わたしたちには他の人々のためになすべき働きがあることを認め、理解することができないのであろうか。わが兄弟姉妹がたよ、あなたがたは、目があっても見ず、また耳があっても聞かない人々のうちにいるのだろうか。神がご自分のみ旨についての知識をあなたにお与えになったのは、無駄だったのでしょうか。終わりの時が近いことについて神があなたに何度も警告したことは無駄だったのであろうか。あなたは、この世に来たるべきことに関するこのお方のみ言葉の宣言を信じるのであろうか。あなたは、神の裁きが地上の住民の上にさし迫っていることを信じるだろうか。そうであれば、どうして、安穩と不注意に無関心に座っておれるのであろうか。

一日過ぎるたびに、わたしたちは終わりに近づいている。それはまた、わたしたちを神に近づけているのであろうか、わたしたちは目を覚まして祈っているのであろうか。わたしたちが交わっている人々は日々、わたしたちの助け、わたしたちの導きを必要としている。彼らは折にかなった一言が聖霊によって確かな場所に打たれた釘のように心に真つすぐ届く精神状態にあるかもしれない。明日には、彼らが二度と手を差し伸べることでできない場所へいってしまうかもしれない。これらの同胞の旅人に対して、わたしたちの感化はどのようなものであろうか。わたしたちは彼らをキリストへ導くためにどのような努力をはらっているのであろうか。(教会への証 9 巻 26, 27)

終わりの時は近く、盗人が夜に音を立てずに近づくように、ひそかに忍び寄っている。主の恵みにより、わたしたちは他の人々と同じように眠ってしまうのではなく、目を覚まし、酔っていることがないように。まもなく、真理が栄光に満ちて勝利を収めることになる。そして今、神と共に働く共労者となることを選ぶ人々は、それと共に勝利する。時は短い。まもなくだれも働くことができなくなる夜が来る。現代の真理を喜んで受けている人々は、今真理を他の人々と分かちつために急ごうではないか。(同上 135)。

信仰により単純な方法により癒す

「イエスが道をとっておられるとき、生れつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、『先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか』。イエスは答えられた、『本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。…… イエスはそう言って、地につばきをし、そのつばきで、どろをつくり、そのどろを盲人の目に塗って言われた、『シロアム（つかわされた者、の意）の池に行って洗いなさい』。そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって、帰って行った。」（ヨハネ 9:1-3, 6, 7）

弟子たちは、盲人に視力を与えることにおいて、だれが罪を犯したか、あるいは犯さなかったかについて議論をするのではなく、神の力、このお方の憐れみと同情を理解することを求められていた。それはすべての者が、洗いに行くように言われた泥や池に癒す力があるのではなく、キリストにその力があることを確信するためであった。（サインズ・オブ・タイムズ 1893 年 10 月 23 日）

治癒的な媒介を用いることは、神のみ言葉で是認されている。イスラエルの王であったヒゼキヤは病気であり、神の預言者は彼が死ぬというメッセージを携えてきた。ヒゼキヤ王が主に叫んだところ、主はご自分のしもべの祈りを聞かれ、彼の命に 15 年が加えられるというメッセージを彼に伝えられた。神からの一言は直ちにヒゼキヤを癒したはずであったが、次のような特別な指示が与えられた。「干いちじくのひとかたまりを持ってこさせ、それを腫物につけなさい。そうすれば直るでしょう」（イザヤ 38:21）……

キリストはあるとき盲人の目に泥を塗り、「シロアム（つかわされた者の意）の池に行って洗いなさい」とお命じになった……（ヨハネ 9:7）。このいやしはただ大治癒者の力によってなされたのであるが、キリストは自然界の簡単な手段を利用された。彼は薬剤による治療を奨励されなかったが、単純な自然の療法を用いることを是認されたのである。

病人がいやされるように祈ったら、その結果のいかんを問わず、神に対する信仰を失わないようにしよう。もし死別しなければならぬときがきたら、神の手がその苦しい杯をわたしたちのくちびるに与えておられることを覚えて、それを受けよう。しかしもし健康が回復されたならば、いやしの恵みを受けた者は創造主に対して新たな義務を負わされたことを忘れてはならない。十人のらい病人がきよめられた時、ただひとりだけがイエスを見だし、栄えを帰すために帰ってきた。わたしたちは神のあわれみを感じなかった考えのない九人のようであってはならない。（ミニストリー・オブ・ヒーリング 210, 211）

わたしたちは盲人でいるか、 あるいは癒されるか

「そこでイエスは言われた、『わたしがこの世にきたのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである』。そこにイエスと一緒にいたあるパリサイ人たちが、それを聞いてイエスに言った、『それでは、わたしたちも盲人なのでしょうか』。イエスは彼らに言われた、『もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが「見える」と言い張るところに、あなたがたの罪がある。』（ヨハネ 9:39-41）

理性を持つ存在が本当に真理を望むなら、神は何が真理であるかを確信させるのに十分な光を彼らにお与えになる。もし、彼らが従う心をもっているならば、彼らは光の中を歩くために十分な証拠を認めるのである。しかし、彼らの心のうちで真理を避けたいと思っているなら、神は彼らの不信を満足させるために奇跡を行うことはなさらない。神は、疑いをもつ機会や原因を完全に取り除くことはなさらない。しかし、彼らが正直に誠実に光をつかみ、その中を歩むのであれば、残っていた疑いが一掃されるまで、その光は増し加えられる。しかし、彼らが闇を選ぶならば、真理に対する彼らの疑念と難癖は増していき、彼らの不信心は強まり、受け入れなかった光は彼らにとって暗闇となる。そしてその暗闇はなんと大きいことであろう！その暗闇は、光がもたらされたときよりも大きい。なぜなら、拒まれた光は、初めてそれが彼らの上に輝いたときよりも明るく、豊かだったからである。ユダヤ国家の場合がそうであった。また、あらゆる世代におけるクリスチャンの世界においても同様のことが生じる。光を拒む者たちは自らの上に、怒りの日のための怒りを積むのである。永続的に疑いの中を歩む人々がいる。彼らは疑いを食し、疑いを喜び、疑いを語り、信じるのが彼らの益となるすべてのことに疑問を投げかける。このように神のみ言葉による明白な証を軽く扱い、また彼らにとって信じるのが不都合であったり人気がなかったりするからといって信じることを拒む人々にとって、光は最終的には暗闇となる。真理は暗くされた理解力には誤りとして見え、誤りは真理として受け入れられるのである。……

真理は漸進的である。そして、最後の偉大な日のために準備をしている人々は、預言や、キリストや使徒たちの教訓から自分たちの上に輝いている積み重なる光に従って前進する。裁きの日においては、受ける機会のなかった知識が不足していたからといって有罪に定められる人はない。……神の使命者たちが筆舌をもって提示してきた真理、彼らが人々に示した神のみ言葉の宝、暗くなった思いの部屋を貫いた光は、もし拒絶されるならば、最後の大いなる日に、彼らにとって不利な証人となるのである。（ビュー・アンド・ヘラド 1886年1月5日）

あなただけのために

「〔イエスは言われた、〕わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。……わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。わたしの父がわたしに下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ手から、それを奪い取ることはできない。わたしと父とは一つである。』」(ヨハネ 10:14, 27-30)

イエスは、われわれを個人的に知っておられ、われわれの弱さを感じて心を動かされる。イエスはわれわれの名前をみな知っておられる。イエスはわれわれの住んでいる家を、またその家に住んでいるひとりびとりの名を知っておられる。イエスは、時々、ご自分のしもべたちに、どこそこの町の何という通りのこれこれの家に行つてわたしの羊の一匹をさがしなさいと命じられた。

ひとりびとりは、あなたも救い主がその者のためだけに死なれたかのように、よくイエスに知られている。ひとりびとりの悲嘆はイエスの心を動かす。助けを求める叫びはイエスの耳に達する。イエスはすべての人をみもとに引きよせるためにおいでになった。イエスは彼らに、「わたしに従ってきなさい」とお命じになる。するとみたまが彼らの心に働いて、彼らがみもとにくるように引きよせる。多くの者は引きよせられるのをこぼむ。イエスはそれがだれであるかをご存知である。イエスはまた、ご自分の呼び声をよこんできて、羊飼であられるイエスの守りに身をゆだねようとする者をご存知である。「わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る」とイエスは言われる(ヨハネ 10:27)。イエスは、この地上にほかにだれもいないかのように、ひとりびとりを気づかわれる。……

キリストに献身した魂は、キリストの御目には、全世界よりもとういのである。救い主は、ひとりがみ国に救われるためであっても、カルバリーの苦悩を経験されたであろう。主は、ご自分がそのために死なれた魂を決してお捨てにならない。イエスに従う者たちが自分からイエスを離れようとしない限り、イエスは、彼らを固くひきとめておられる。

われわれには、どんな試練のときにも、決してわれわれを裏切られることのない助け主がある。主は、われわれが誘惑に抵抗し、悪と戦い、ついには重荷と悲しみにおしつぶされてしまうがままに、放っておかれない。いまは、イエスは人間の目からかくされているが、信仰の耳は、イエスのみ声が、「恐れるには及ばない、わたしがあなたといっしょにいるのだ」と言われるのを聞くことができる。……わたしは、あなたの悲しみに耐え、あなたの戦いを経験し、あなたの誘惑に会った。わたしはあなたの涙を知っている。わたしもまた泣いたのである。人間の耳に聞かせられないほどの深い悲しみをわたしは知っている。あなたは、自分がうち捨てられた孤独な人間だと思つてはならない。この地上にはあなたの苦しみを心の琴線に感じてくれる人がなくても、わたしを見、そして生きなさい。……

われわれは天父の賜物であり、イエスの働きの報いであるから、イエスはわれわれを愛されるのである。イエスは、われわれをご自分の子として愛される。読者よ、イエスはあなたを愛される。天そのものは、イエスよりも偉大なもの、イエスよりもよいものを与えることができない。だから信頼なさい。(各時代の希望中巻 278-281)

3月27日

謙遜をもって種をまく

「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」(ヨハネ 10:16)

神は、まだバビロンの中にご自分の民を持っておられる。そして、神の刑罰が下る前に、これらの忠実な人々を呼び出して、彼らがその罪にあずからず、「その災害に巻き込まれないように」しなければならないのである(黙示録 18:4)。そこで、この天使一天から下って来、栄光をもって地を照らし、力強い声でバビロンの罪を知らせる天使一によって象徴されている運動が起こる。この天使のメッセージと関連して、「わたしの民よ。彼女から離れ去れ」という呼びかけが聞かれる。これらの布告は、第三天使のメッセージとともに、地上の住民に与えられる最後の警告なのである。(各時代の大争闘下巻 372)

わたしたちはつねに、自分たちが改革者であるが偏屈な者ではないことを表すべきである。……働き人たちは、彼らが羊を襲おうとして入り込む狼であるとの印象を与えないように十分気をつけ、牧師たちに自分の立場と、自分の使命の目的一人々の注意を神の尊い言葉へと向けるよう呼び求めること—を理解させなければならない……

わたしたちが働きをなすために新たな場所に入る際、カトリック信者たちの思いの中に偏見を生じさせたり、彼らがわたしたちを敵だと思うようなことは何もしないようにしなければならない。……彼らの中にも、救われる人が多数いる。神はたしかに、わたしたちをテストなさるように彼らをテストなさる。そして、神が彼らにお与えになる光をどれくらい喜んで受け入れるかが、このお方のみ前における彼らの立場となる。わたしたちは、全ての水のほとりに種をまかななければならない。なぜなら、その種を成長させるのは神だからである。(福音宣伝者 (1892) 92)

明確な真理が、まっすぐに人々に与えられなければならない。しかしこの真理は、キリストの精神をもって伝えられなければならない。わたしたちは、狼の中にいる羊のようであなければならない。キリストがわたしたちに与えて下さった注意を守らず、忍耐と自制心を働かせない者たちは、主人のために働くという貴重な機会を失う。神は、神の律法に違反している人々に対して攻撃的な演説をする働きを、ご自分の民に与えてはおられない。いかなる場合でも、わたしたちは他の教会を攻撃すべきではない。聖なる真理を委ねられた民として、わたしたちは怠慢で、明らかに不忠実であったことを覚えていよう。……もし、改心すれば、現代の真理が人類に何をなすかについて正しく表すはずの人々の心に手を差し伸べるため、真剣な努力をしてきたならば、今わたしたちの働きはどれほど進んでいたことであろう。(教会への証 9 巻 236)

試される

「もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じなくてもよい。」(ヨハネ 10:37)

キリスト教を信じると告白することは、神の御前においては何の意味も持たない。しかし、神のご要求に対する真実でへりくだった自発的な従順によって、養子縁組による子となり、神の恵みを受ける者となり、このお方の偉大な救いにあずかる者となる。そのような光景は、世と天使と人々にとって、特別な見せ物となる。……多くの人々は、言葉では神を愛するが、行動や真理においては愛さない。彼らの一連の行動や彼らの働きは、彼らが光の子ではなく闇の子であることを証している。彼らの働きは神にあってではなく、利己心と不義のうちになされてきた。彼らの心は、このお方の新たにする恵みを知らない。彼らは、キリストと同じように歩むように導く変化させる力を経験したことがない。(レビュ・アノ・ハラルド 1885年 5月5日)

兄弟姉妹がたよ、あなたが光を多く受けるほど、神に対するあなたの義務はより大きくなる。あなたのクリスチャンとしての成長は、あなたが享受する特権に比例するべきである。一日過ぎるごとに、あなたは新たな試練に立ち向かい、新たな責任を負うためによりよく準備ができていくべきである。あなたは、この事実を喜んで受け入れるだろうか。あなたは、他の人々に対する自分の義務を自覚しているだろうか。あなたの生活における一つ一つの言動が周囲の人々に与えている影響について考えなさい。長く続く印象が残されるかもしれない。そして、それがあなた自身に祝福としてあるいは呪いとして戻ってくるのである。これを考えるとき、それは人生に恐るべき厳粛さを与える。そして、それによって神がその知恵によってわたしたちを導いて下さるようにへりくだって祈ることにより、わたしたちはこのお方のみ許へ駆りたてられるべきである。

もし、この主題がわたしに示された通りにみな悟ることができるなら、多くの人は今よりもはるかにもっと慎重な生活を送るようになるであろう。クリスチャンであると公言する者がイエスの素晴らしさ、このお方の完全、うるわしさを褒め称えながら、その大変な献身のよそおいの下で、他の人々に対して非常に厳しく、鉄の足かせのようなルールを適用するのはたやすいことである。彼らが自分の日常生活に真理の諸原則を一度も実践したことがないのに、真理について語り、神の律法を守ることの重要性を話すことは容易である。彼らは、神に仕えることに成功してこなかったため、神との交わりから得る貴重な安らぎや援助を失ってしまった。

わたしたちは、イエスに属している。このお方はご自分の尊い血によってわたしたちを買ってくださいました。わたしたちは、イエスに対して決して返済できない感謝という負債を負っている。しかし、それをわたしたちは日々、自発的な無私の奉仕によって認めるべきである。もし、わたしたちがこれをすべきほどに自覚するならば、キリストようになる。キリストのように、他の人々に対して善をなすことができるように、自己を否定するようになる。(同上 1885年 1月20日)

3月29日

わたしたちはどのような精神をもっているだろうか？

「さて、イエスが天に上げられる日が近づいたので、エルサレムへ行こうと決意して、その方へ顔をむけられ、自分に先立って使者たちをおつかわしになった。そして彼らがサマリヤ人の村へはいって行き、イエスのために準備をしようとしたところ、村人は、エルサレムへむかって進んで行かれるというので、イエスを歓迎しようとはしなかった。弟子のヤコブとヨハネとはそれを見て言った、『主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか』。イエスは振りかえって、彼らをおしかりになって、言われた『あなたがたは自分がどのような精神であるのかわかっていないのである。人の子は、人の命を滅ぼすためではなく、救うために来たのである』。」（ルカ 9:51-56 英語訳）

キリストを受け入れるように人々に強制することは、キリストの使命の一部ではない。良心を強制するのは、サタンと、サタンの精神に動かされている人々である。悪天使たちと同盟している人たちは、正しいことのために熱心であるようにみせかけながら、実は人々を宗教についての自分たちの考え方に変えてしまうために、同胞に苦しみを与える。しかしキリストは、いつもあわれみを示し、ご自分の愛をあらわすことによっていつも人々の心をとらえようとしておられる。イエスは、一つの魂のうちに競争者がいるのをみとめることや、中途半端な奉仕を受けることがおできにならない。主はただ自発的な奉仕、愛に迫られた自発的な心の屈服をお望みになる。われわれの働きを理解しない人たちや、われわれの考えと反対の行動をするような人々を傷つけたり滅ぼしたりしようとする気持ち、われわれがサタンの精神を持っていることの決定的な証拠はない。（各時代の希望中巻 287）

自分の兄弟や姉妹の品性を、彼らが自分たちを扱う方法によって測る人が多くいる。わたしたちはこの世で、他の人々から大切にしてもらうために生きているのではなく、むしろ他の人々を助けるために生きているのである。そして、わたしたちは、他の人々がどれくらい快く自分たちに奉仕するかによって、彼らの宗教的な立ち位置を評価してはならない。わたしたちは、気持ちのよい人、不愉快なやり方をしない人々を愛する。そうであれば、わたしたちの魂にキリストの御霊という恵みを集め、それを自分たちの生活に持ち込もうではないか。こうしてわたしたちが他の人々に抱くような同じ嫌悪感をもって、神がわたしたちに背を向けられることがないためである。品性の欠点は、勝利するように励ましを必要としている人々に対してしばしばわたしたちの心を閉ざしてしまう。主は、わがままで、不愉快で、不遜で、不従順で、無礼で、貴賓として尊ぶべきお方を忘れがちなわたしたちに対してご自分の心を閉ざされる。わたしたちは、クリスチャンの礼儀をもってイエスに捧げるべき敬意、尊敬、誉を拒んでおきながら、他の人々には要求するのであるか。わたしたちの誇り、利己心をちりの中にへりくだらせよう。自己がキリストと共に神のうちに隠されるようにしよう。そしてもしわたしたちが誤っている人に対して許さない精神をいだいているならば、主はわたしたちの不義をお許しにならないことを覚えていよう。（ビュー・アンド・ワールド 1887 年 4 月 5 日）

律法を守る者か？ それとも犯す者か？

『ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、「この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います」と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか。』彼が言った、『その人に慈悲深い行いをした人です』。そこでイエスは言われた、『あなたも行って同じようにしなさい』。(ルカ 10:30-37)

レビ人や祭司は、教会の中で同情と助けを必要としている人に対する無関心を表す種類の人々を代表している。そのような人々は、教会における彼らの地位にもかかわらず、律法を犯す者である。そのサマリヤ人は、キリストと共にいる真の助け手、すなわち善をなすことにおいて、キリストの模範を模倣している種類の人々を表している。……

ある人々は、これらの義務においてなんの経験も持たない。彼らは、全生涯をレビ人や祭司のように生き、人の横を通り過ぎてきた。教会にはなすべき働きがあり、もし、その働きがなされないならば、彼らに暗闇がもたらされるのである。教会は、全体としてまた個人として、自分たちの動機を忠実に吟味し、自分たちの生活を、唯一の正しい模範なるお方の生活や教えと比較しなければならない。不幸な人、盲人、足が不自由な人、病人、やもめ、孤児に対してなされるすべての憐れみ、慈悲、深い思いやりの行為を、主はご自身になされたものとみなされる。そして、これらの働きは天の書物において記録され、報いを受ける。他方で、不幸な人に対してレビ人や祭司のような無関心さを示し、または他の人の不幸につけこみ、利己的に自分たちが有利になるために彼らの苦悩を増す人々に対しては、書物に不利な記録が記される。一つ一つの不正な行為、またわたしたちのうちにいる不幸な人々に対して表す一つ一つの不注意な無関心な態度について、神は確かに報いられる。全ての人は、最後のとき、自分の行い通りに報いを受けるのである。(教会への証 3 巻 512, 513)

3月31日

神の王国はどのように来るか

「神の国は、見られるかたちで来るものではない。また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ。」(ルカ 17:20, 21)

イエスの在世当時の政治は墮落していて、圧制的であった。棄てておけない悪弊一搾取、偏狭、暴虐な残酷さがいたるところにみられた。それでも救い主は、社会改革を試みられなかった。主は国民の悪弊を攻撃したり、国民の敵を非難したりされなかった。主は、権力者たちの権威や行政に干渉されなかった。われわれの模範であられたおかたは、現世の政治から遠ざかっておられた。それは、主が人々の不幸に対して無関心であられたからではなく、これを救う方法がただ人間の外面的な手段にはなかったからである。効果があるためには、救済策は個人に及び、心を生まれかわらせねばならないのである。

キリストのみ国は、法廷や会議や立法議会などの決定や、世俗的に有力な人たちの後援によってではなく、聖霊の働きを通して、キリストの性質が人間性のうちにうえつけられることによって、建てられるのである。……

いまま、キリストの時代と同じように、神の国の働きは、世の支配者たちにみとめられ、人間の法律によって支持されることをやかましく求める人たちの手にはなくて、受け入れる人々に、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」とのパウロの経験をさせるような霊の真理を、キリストのみ名によって民に宣言する人たちの手にあるのである (ガラテヤ 2:19, 20)。(各時代の希望中巻 315, 316)

神の国は目だつような外観をもって現われるのではない。それは、神のみ言葉の静かな感動や心の中の聖霊の働きや魂とその生命であるキリストとのまじわりによって来るのである。人間の性質がキリストの完全な品性と同じようになるときに、神の国の力の最高のあらわれがみられるのである。

キリストのしもべたちは世の光とならねばならないが、神は、光を輝かすように努力せよとは、命じておられない。神は、おのれのすぐれた善を誇示しようとするうぬばれた努力をおよこびにはならない。神は信者たちの心が、天の性質でみたされ、そのために、彼らが社会と接するとき心の中にある光が表われるようにと望んでおられる。生活のすべての行動にあらわれた不変の誠実さによって光は輝くのである。

富も地位も、高価な設備や建築物や装飾も、神のみわざの進展になくてならないものではない。また人々の称賛を得たり、虚栄心を満足させるような功績も必要ではない。どんなにりっぱであっても、世俗的なはなやかさは神の前に無価値である。(ミストリー・オブ・ヒーリング 17)

研究 15

清めの特別な働き



このお方を礼拝せよ

このお方を礼拝せよ

特別な清めのメッセージは、黙示録 14 章の中でさらに明瞭に示されています。この中で第一天使が、永遠の福音、神の義をたずさえてきて「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」と伝えていることを見てきました。この第一天使のメッセージの締めくくりは、「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」、すなわち創造主を礼拝せよ、とのメッセージです。そして、黙示録 14 章の中の第一天使と第三天使のメッセージのつながりは、この礼拝なのです。それでは、礼拝とは何でしょうか。なぜ、礼拝するのでしょうか。

礼拝する理由

「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」（ヘブル 1:6）。

「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め（礼拝せよ）」（黙示録 14:7）。

「主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありますか。あなただけが聖なるかたであり、あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからです」（黙示録 15:4）。

「ただ大きな力と伸べた腕とをもって、あなたがたをエジプトの地から導き上った主をのみ敬い（礼拝し）、これを（伏し）拝み、これに犠牲をささげなければならない」（列王記下 17:36）。

これをレビ記 23:27 と比較してみましょう。

「特にその七月の十日は贖罪の日である。あなたがたは聖会を開き、身を悩まし、主に火祭をささげなければならない」（レビ記 23:27）。

聖なる礼拝の義務と真の基礎

「第一天使は、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ』、神を天地の創造主として

礼拝せよと、人々に呼びかけている。そうするためには、神の律法に従わなければならない。賢者は、『神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である』と言っている(伝道の書 12:13)。神の戒めに対する服従がないならば、どんな礼拝も神に喜ばれることはできない。『神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。』『耳をそむけて律法を聞かない者は、その祈りさえも憎まれる』(ヨハネ第一 5:3、箴言 29:9)。

神を礼拝する義務は、神が創造主であり、他のすべてのものはその存在を神に依存している、という事実に基づいている。そして、聖書の中で、異教の神々にまさって神が崇敬と礼拝を受けるべきであると示されているときは、常に、神の創造の力がその実証としてあげられている。『もろもろの民のすべての神はむなし。しかし主はもろもろの天を造られた』(詩篇 96:5)。『聖者は言われる、「それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいのか。」目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。』『天を創造された主、すなわち神であって、……地を……造られた主はこう言われる、「わたしは主である、わたしのほかに神はない。』』(イザヤ書 40:25、26、45:18)。詩篇記者も言っている。『主こそ神であることを知れ、われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。』『さあ、われらは拝み、ひれ伏し、われらの造り主、主のみにひざまずこう』(詩篇 100:3、95:6)。また、天において神を礼拝する聖者たちは、神をあがめるべきその理由として、『あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました』と述べている(黙示録 4:11) (各時代の争闘下巻 156,157)。

『創造の記念としての安息日の重要さは、われわれがなぜ神を礼拝すべきであるかという真の理由を常に考えさせるところにある。』すなわち、神は創造主であって、われわれは神に造られたものだからである。『それゆえに、安息日は、礼拝の根拠そのものである。……七日目における礼拝だけでなく、すべての礼拝の真の根拠は、創造主と造られたものとの区別にある。……安息日を守ることは、『天と地と海と水の源とを造られた』真の神に対する忠誠のしるしである。それゆえに、神を礼拝し神の戒めを守ることを命じるメッセージは、特に第四条の戒めを守るよう人々に呼びかけるのである』(各時代の争闘下巻 155,156)。

子供が親を敬うべきであるように、被造物は、創造主に礼拝をすべきです。

そして、その礼拝とは、このお方が何をして下さったかを知り、感謝を表すことです。黙示録の中でヨハネは天でなされている礼拝を見ました。

真の礼拝一大いなる犠牲の真価を認め、感謝すること

「われらの主なる神よ、あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました。御旨によって、万物は存在し、また造ら

れたのであります」(黙示録 4:11)。

「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」(黙示録 5:12)。

「主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありますか。あなただけが聖なるかたであり、あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからであります」(黙示録 15:4)。

天でなされるこの礼拝に参加できるように、この地上で真の礼拝を始める人々を天は待っています。

「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである」(ヨハネ 4:23)。

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」(ローマ 12:1)。

ここで「生きた」供え物というのは、living、つまり生きている供え物を意味します。神への礼拝は、切り取った一場面はなく、生きている命そのものが神へ捧げられる礼拝となるように—それが天での生活であり、命であるということです。

それでは、罪人のわたしたちが、いったいどのようにしてそのような礼拝を捧げることができるのでしょうか。神に礼拝を捧げるために宮に上った二人のたとえをもって、イエスが教えて下さった方法を見てみましょう。

「神様、罪人のわたしをおゆるしてください」(ルカ 18:13)。

「パリサイ人には、罪の自覚がなかった。聖霊は、彼を動かすことができなかった。パリサイ人の魂は、自分の義というよろいをまとっていたので、天使の手が放つ鋭い矢も、それをさし通すことができなかった。キリストは罪人であることを自覚した人だけをお救いになれるのである」(キリストの実物教訓 137,138)

「人間は、自分で、自分のあやまちをさとることはできない。『心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか』(エレミヤ書 17:9)。わたしたちは心に思ってもいけないことなのに、いかにも心が貧しいかのように表現してみることができる。また、心の貧しさを神に訴えながら、自分がどんなにけんそんで義に富んでいるかを誇ることができる。ほんとうに自分を知る方法は、ただ一つしかない。それは、キリストをながめることである」(キリストの実物教訓 138)。

「外見上どんなにりっぱに律法をまもってみても、それは単純な信仰と全的自己否定の代わりにはならない。しかし、人間は、自分で自分をむなくすること

はできない。ただキリストが働いてくださることに同意することができるに過ぎない。そうすれば魂は次のように言うようになろう。わたしは弱いのです。そして少しもキリストに似ていません。このようなわたしですが、どうぞお救いください。主よ、わたしの心をお受けください。わたしはこれをささげることではできません。これは、あなたのものです。どうぞきよく保ってください。これを、わたしが保っていることはできません。どうぞ、わたしを練り、形造り、清い聖なるふんい気の中に引き上げて、あなたの豊かな愛の流れが、わたしを通して流れ出るようにしてください。

この自己否定は、クリスチャン生活の出発において行なうばかりでなくて、天に向かって前進するごとに、新たにしなければならないものである。……」（キリストの実物教訓 159）。

「神に正しく仕えるためには、神のみたまによって生れなければならない。みたまは心をきよめ、思いを新たにし、神を知り愛する新しい能力をわれわれに与える。それは神のすべてのご要求によるこんで従う心をわれわれに与える。これが真の礼拝である。それは聖霊の働きの実である」（各時代の希望上巻 225）

ここに、イエスがニコデモに「よくよくあなたに言うておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」と言われた意味を新たに見いだすのです。真の礼拝を捧げることができるようにしてくださるのも、神の恵みであり、特別な清めの働き結果です。

結果として！

「そのみ名にふさわしい栄光を主に帰せよ。供え物を携えて主のみにきたれ。聖なる装いをして主を拝め」（歴代志上 16:29）。

「聖なる装いをして主を拝め、全地よ、そのみ前におののけ」（詩篇 96:9）。

「たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません」（ダニエル 3:18）。

「いちじくの木は花咲かず、ぶどうの木は実らず、オリブの木の産はむなくなり、田畑は食物を生ぜず、おりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ。主なる神はわたしの力であって、わたしの足を雌じかの足のようにし、わたしに高い所を歩ませられる」（ハバクク 3:17-19）。

朝夕、そして安息日ごとに礼拝するわたしたちの礼拝は、天の礼拝と調和しているでしょうか？わたしたちは、どれくらいこのお方がして下さったことを悟り、その感謝のうちに生きているでしょうか？

このお方の救う力を疑うことです。信仰を不信仰に取って代わらせなさい。あなたのために刺しとおされた御手を見て、それらの救う力を喜びなさい。

神さまとキリストがあなたに関心を持っておられ、そして天の万軍がことごとく、罪人の救いのための働きに従事していることを覚えていなさい。

キリストが地上におられた間、このお方はご自分の奇跡によって、最高にまで救う力を持っておられることを示されました。体の病気をいやすことによって、このお方は心から罪を取り去ることのできることを示されました。

このお方は足の不自由な人を歩かせ、耳の聞こえない人を聞かせ、そして盲人が見えるようにされました。このお方はあわれな病人を清め、中風の人やあらゆる病気にかかっていた人々を癒されました。

このお方の言葉によって、悪霊でさえ彼らがとりついていた人々から追い出されました。このすばらしい働きを見た人々はおどろいて、「これは、いったい、なんという言葉だろう。権威と力をもって汚れた霊に命じられると、彼らは出ていくのだ」と言いました（ルカ 4:36）。

油揚げの山芋詰め

■材料

油揚げ	5 枚
山芋	1/2 本
人参	1/3 本
セロリ	5 センチ
舞茸	1 パック
粉末昆布だし	1 本
はちみつ	大さじ 2
しょう油	大さじ 3
塩	少々

■作り方

1. 油揚げを半分に切って、中を開きます。
2. 山芋をすります。
3. 人参を 5 ミリ四方くらいに切ります。
4. セロリを縦に 5 等分にして、長さを半分にします。
5. 舞茸を小分けします。
6. 油揚げに野菜をすべて入れ、楊枝でとめます。
7. かぶるくらいの煮汁に調味料をすべて入れ、弱火で煮汁がなくなるくらいまで煮詰めます。
8. 冷ましてから楊枝を取って、器に盛ります。

山芋が固まって、お餅のようになります。味付けはお好みで調節してください。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第24話 良い羊飼いい(II)

「よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔い改めを必要としない 99 人の正しいためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう」(ルカ 15:7)。

わたしたちは罪を犯し、そして神さまからさまよい出ました。キリストはわたしたちが囲いから迷い出た羊のようであると言われました。このお方はわたしたちが罪なく生きるのを助けるために来られました。これをこのお方はわたしたちを囲いにつれ帰ると言われているのです。

わたしたちが羊飼いと共にもどり、そして罪をやめるとき、キリストは天にいる御使たちに「わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから」と言われます。それから、喜びの讃美が天使の聖歌隊から鳴り響き、最も豊かな調べが全天を満たします。

キリストは、わたしたちに羊をつれずに羊飼いが悲しげに帰ってくる光景を示してはおられません。ここに神さまの囲いから迷い出た羊の一匹でさえも見過ごしにされないという約束があります。

一人も助けなくおき去りにされることはありません。おとなしくあがなわれるすべての人を、救い主は罪という荒野から救ってくださいます。



そうであれば、囲いから迷い出ているすべての人は、勇気を出しましょう。良い羊飼いはあなたを探しておられます。このお方の働きは「滅びる者を救う」ことであることを覚えましょう。そして、それはあなたなのです。

あなたの救いの可能性を疑うということは、無限の代価であなたを買ってくださった

(43 ページに続く)